

謀陰の高円

三峻久和



田高の陰謀

和久峻三

サンライ出版

円高の陰謀

昭和53年8月8日 1刷

定価 八五〇円

著者 和久峻三

発行者 清水大三郎

発行所 株式会社 サンケイ出版

東京都千代田区神田錦町三の一五〇(TEL)

TEL(東京)二九五〇九一五

大阪市北区梅田二の四の九(TEL 530)

TEL(大阪)三四三一二二(代)

印刷所 堀内印刷

製本所 誠幸堂

※万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

円高の陰謀

目次

秘密代理人 7

盗聴 14

極秘情報 22

ハンザ国際銀行 37

「真昼の情事」 44

Y作戦開始 52

恐喝 59

黒い罠 81

銀行乗取り

104

夜の闖入者

133

パニック

148

怪文書

162

凶夢

191

陰謀の結末

199

長編推理小説

円高の陰謀

秘密代理人

エルムとオークの繁る静かな森の都ワシントンDC。高層ビルがひしめき合い喧噪と欲望にみちみちているニューヨークとは、うって変った閑静なたたずまいである。

しかし、この清楚な外観からは、うかがい知れない世界があるのもワシントンDCだ。全世界に対して陰に陽に強力な政治的影響力を及ぼすアメリカの権力中枢が、ここに集中している。ホワイトハウス、国会議事堂、司法省、FBI、商務省、そして財務省……。

一九七×年八月二十七日。

ホワイトハウスとは眼と鼻の先のアメリカ財務省の一室で密議が交わされていた。

「……われわれの推計によっても、合衆国の八月の貿易収支は、二十六億ドルの赤字が見込まれる。……二十六

億ドルだよ、きみ。この数字は、六月の赤字二十八億ドルに次ぐ史上第二の赤字幅だ。それにひきかえ日本の貿易黒字は累積の一端をたどって増えつづけている。OECDの専門家の見通しでは、ことし暦年で、日本の経常黒字幅は百億ドルを超えるとみている。にもかかわらず、日本政府の黒字減らし対策は、口先だけで一向に効果をあげていない。そればかりか、日本の製鉄メーカーはダンピングにつぐダンピングで、合衆国の鉄鋼市場を大混乱に陥れた。ビッツバーグの大製鉄工場が倒産し、日本商社に身売りする商談が真剣に進められている現状だ。鉄鋼だけじゃない。日本製の自動車、カラーテレビ、トランジスタラジオが合衆国の市場を、独占する勢いで進出している。そのために、企業の倒産、失業者の増大を招いた。いまや黄色い旋風が合衆国全土に荒れ狂い、われわれの国土を食いつぶそうとしている。……日本は、もはや、われわれの友好国ではない……」

財務省特別顧問のリチャード・ヒラリーは、ここで一息いれて、葉巻に火をつけた。

彼は、マホガニーのデスクを前にして、ゆったりと椅子に腰をかけ、少し、そり身になって相手を見つめた。

「もういいよ。効能書きは、もう沢山だ。要するに、きみはY作戦に踏み切るに至った背景を説明したいわけだろう？ 聞かなくても、わかってるよ。……それでだね。わたしの任務は、国際為替市場で醸成されつつある円高ドル安の要因をふまえて、これに導火線を仕掛ければいいんだろう？」

弁護士レイモンド・アトキンズは、大きな灰色の眼をむいてヒラリーを見返した。

アトキンズは、言わばヒラリー財務省特別顧問の秘密代理人のような仕事をしているWLである。

WLとは、ワシントン・ロイヤルの略称で、ワシントンに事務所を置く大物弁護士を指すが、法廷に出て訴訟活動をする普通の弁護士とは、およそかけはなれた存在である。

WLは、合衆国の権力中枢に深く食い込み、行政府の政策決定にも大きな影響力を及ぼしている一握りの限られた弁護士たちの総称である。

ウォーターゲート事件でミソをつけたニクソン元大統領も、このWLの一人であったことを思えば、WLの実態というものが、およそ想像できよう。日本流に言え

ば、政治ブローカーのようなものだが、その活動範囲は合衆国の国内に限定されることなく、広く海外主要国に及んでいる。

それだけに報酬は莫大な額に上り、普通の弁護士の十倍以上の年収を得ているといわれる。彼らが受取る報酬は、ほとんどが闇の報酬で占められており、所得申告が出ないので実態がつかみにくいのだが、年間百万ドルの収入を得た例が明るみに出たことがあった。

「導火線を仕掛けるだって？ ……そう。そのとおり。なかなか、うまいことを言うじゃないか……」

ヒラリー特別顧問はアトキンズ弁護士を見つめて上機嫌に笑いかけ、葉巻の煙を吹きあげた。

アトキンズ弁護士は、脚を組みかえ、ヒラリーのつぎの言葉待つ表情になった。

ヒラリー特別顧問は言った。

「Y作戦が成功すれば、円の対ドル相場は急上昇し、日本政府は、われわれが仕掛けた円高の脅威の前に屈伏せざるを得なくなる」

ヒラリーは合衆国の国益を代表するかのよう、星条旗を背にして、言葉に力をこめた。

葉巻の紫煙が、輪を画いて、ゆっくりとたちのぼっていくのを、アトキンズ弁護士は眼で追っていた。

ヒラリー特別顧問の斜め背後に立てかけてある星条旗のボールのてっぺんで、金色の翼を広げている威厳めいた合衆国の国鳥、白頭のワシが紫煙に巻かれて咳きこんでいるみたいだった。

その様子をアトキンズは、皮肉めいた微笑を浮かべながら見つめていた。

アトキンズは頭の切れる男だった。W.L.のうちでも金融問題が専門で、ウォール街はもちろんのこと、東京、香港、シンガポール、ペイルート、ロンドン、フランクフルト、チューリッヒ、パリの各銀行筋に顔が広く、その敏腕ぶりは、自他ともに認めるところであった。

彼は、自分が何をなすべきかを、すでに充分に理解していた。あと一カ月後に予期されるYデー——つまり、世界各地の為替市場で、いっせいにドル売り円買いの攻勢が火ふたを切る日——を目標に、秘密裡に裏工作をしておく。これが彼の任務であった。

だが、ユダヤ系アメリカ市民であるアトキンズ弁護士には、同時に自分自身の個人的な野望を実現するチャン

スを、この任務の中に織り込んでいた。豊かな口髭くもひげをたくわえた英国紳士風の貴族的な顔だちをしたヒラリー特別顧問のように、合衆国の利益のみに東奔西走する忠誠心を、この弁護士は持ち合わせていなかったのである。

ヒラリー特別顧問の口髭が動いた。

「きみの任務は決して楽じゃないと思うが、……しかし、それほど困難な仕事とも思えない。財務省の海外駐在員が、ある程度、根まわしをしてくれているんだからね」

この一言に対して、アトキンズ弁護士は敏感に反応した。

「そんなに、お安く見積られては心外だな。報酬の額にも関係することだしね」

報酬については、一本、釘を打っておく必要があると、アトキンズ弁護士は思ったのだ。

「必要経費は別にして、五万ドル出そうじゃないか？」
ヒラリー特別顧問は言った。

「五万ドル？」

アトキンズは、鼻であしらう態度を見せた。

「五万ドルでは不足かね？」

「言うまでもないよ。十万ドルはいただかないとね」

「そりゃあ無理だ。予算がない。……ぎりぎりのところ七万ドルだね。それで我慢してくれ」

「……わかった。わたしはきみの良き友人として、このさい、七万ドルで手を打とう」

二人は十年來の交友關係を保ってきたのだから、良き友人には違いなかった。

しかし、アトキンズ弁護士は、いま、自分の眼の前にふんぞり返っているコロンビア大学出身のエリート官僚に対して、本心を明かしたことは一度もなかったし、心の奥底では、決して氣を許してはいなかった。

アトキンズは、誰も信じない男であつた。彼が信じることのできる唯一の相手は、ドルのみであつた。

だが、そのドルの威信は失墜した。黄色い肌の小柄なジャップにアメリカの市場は、さんざん食い荒されているのである。

アトキンズ弁護士は言った。

「七万ドルで手を打つが、しかし、円建てで支払つてもらいたいな」

「円建て？」

「そうさ。わたしの任務が成功すればＹデー以降、ドルの価値は急激に下る。それにくらべて円は急上昇する。

その任務の報酬をもらうのに、価値の下つたドル建てじゃ、自分で自分の首を絞めるために海外を飛び回るのが同じじゃないか？」

「なるほど」

ヒラリーは、うなずいた。考えてみればアトキンズの言い分は、もっともだと、ヒラリーは思った。

「じゃあ、円建てで支払うことにしよう。いつ、出発できる？ できるだけ早く出発してもらいたいんだ」

「遅くとも月末にはニューヨークを飛び立てると思うがね」

「よし。頼んだよ。これが、きみの立ち回り先のリストだ」

ヒラリー特別顧問は、タイプした紙をアトキンズ弁護士の眼の前に置いた。

ロンドン、フランクフルト、チューリッヒ、パリ、シ
ンガポールの有力銀行家の氏名が、タイプで打ちこまれている。

「たった、これだけでいいのかね？」

「アトキンズは顔をあげ、ヒラリーに言った。

「それで充分すぎるくらいだ。いずれも、世界金融市場に影響力をもつ銀行家ばかりをよりすぐってある。それに、きみと親交のある銀行家ばかりだからね」

「お膝もとのニューヨーク市場は？」

「すでに、こっちで手を打ってあるよ」

「うむ……」

アトキンズ弁護士は考えこんだ。やがて視線をヒラリーに当てると、

「このリストには東京が含まれていないが？」

「東京？」

ヒラリーは怪訝な顔になった。

「そうだ。東京がぬけている……」

アトキンズの鋭い眼ざしが、ヒラリーの表情をうかがっていた。

（ヒラリーは、おれの意図を見ぬいているのだろうか？

……それで、わざわざ東京を除外した？）

アトキンズ弁護士は、猜疑心の強い男であった。

「東京は、敵地の真った中じゃないか？ そんなところへ、いま、どうして乗り込む必要がある？」

「おかしいかな？ 東京は……」

アトキンズは空とぼけて見せた。

「当り前だ。きみは、いつたい、何を考えているんだね。Y作戦は、ニューヨークを基点にして、世界各地の金融市場に布石を打ち、東京市場を目標とする大包囲網を張りめぐらせるのがねらいじゃないか。きみが東京にあらわれて、何のメリットがある？」

ヒラリー特別顧問は、言った。

だが、アトキンズにとつては、真つ先に東京に立ち寄らなければならぬ必要があった。それは、アトキンズ自身の個人的な利益につながる事柄である。その利益は、余りにも巨大であった。

アトキンズは言った。

「東京にはアメリカ系資本の有力銀行の支店が、いくつもあるじゃないか？ チェイス・マンハッタン銀行東京支店とか……」

「そこらあたりは押える必要もない。ニューヨーク本社で手を打ってあるから、それで充分だ。Yデーには、本社からの指令で、東京支店が動くんだから。……それとも、きみは、東京に個人的な用事でもあるのかね？」

ヒラリー特別顧問は、疑わしい眼ざしをアトキンズに向けた。

（やはり、何か感づいていたのだろうか？ ……いや、そんなはずはない……）

アトキンズは言った。

「そうなんだ。実を言うと東京に用事があるんだ。日本人弁護士に任せっきりの法律事務所に立ち寄りたくってね。もう四十日も東京とはごぶさたしているからね」

東京にアトキンズの息のかかった日本人弁護士の法律事務所があることは、ヒラリーも知っている。

「それなら認めよう。ただし、東京滞在は二日間を超えては困る。Yデーは間近に迫っているんだからな。わかったね？」

「二日もあれば充分だよ。じゃあ、東京経由でシンガポール、フランクフルト、チューリッヒ、パリ、ロンドンという順序でいいだろうね？」

「いいとも」

ヒラリーは、うなずいた。

アトキンズ弁護士は、融通のきかないヒラリー特別顧問に東京経由を納得させることができたので、ひとまず

ほっとした。

ヒラリーには秘密にして、東京に立ち回るのは不可能だ。パスポートを見れば、すぐにわかってしまう。だから東京に立ち回るのなら、ヒラリーの了解が必要だったのだ。

「じゃ、これで失礼する。出発の前日には電話をするからね」

アトキンズは立ちあがり、肥った身体を椅子から離れた。

「しっかりやってくれよ。きみの肩には合衆国の安全と利益がかかっているんだ……」

と、ヒラリーも立ちあがり、手をさしのべて握手を求めた。

アトキンズは、その手を握った。骨張った固い手である。

アトキンズは、財務省を出た。

広々とした前庭の緑の芝生のなかから、浮かびあがるようなホワイトハウスの優雅な姿が見えた。

（合衆国の安全と利益だって？ バカバカしい……）

アトキンズは、唇を歪めてポトマック河畔に向って歩

いていった。

九月一日夕刻、アトキンズ弁護士は東京国際空港に降り立っていた。

羽田空港は、あいも変わらず、せせこましくて息がつまりそうだった。

狭いゲートを乗客たちの群れがひしめき合って通りぬける。まるで柵の中へ押しこまれる牛の群れを連想させる殺伐とした光景である。

通関手続きを待つ乗客のいきれと体臭にむせ返りながら、アトキンズは列の最後尾についていた。

彼は公用パスポートを所持していなかった。ヒラリーに頼めば、公用パスポートを発給させることぐらいわけはないのだが、わざわざそうしなかったのだ。

彼は、あくまで一人として、この先、世界各地を回り歩くのである。秘密の任務を帯びてはいるが、あくまでも一弁護士として振るまわねばならない。

星条旗はためかせたアメリカ大使館の公用車が、彼を出迎え、外交官並みに通関手続きにも特別の便宜を図ってもらえるわけでもなかった。

「滞在の目的は？」

汗だくの入国審査官が、パスポートの写真と彼の顔を見くらべながら言った。聞きとりにくいブローケンな英語である。

「観光……」

アトキンズも、額の汗をハンカチでぬぐった。九月一日といえば、暦のうえでは秋のはずだが、湿度が高くむし暑い。

「滞在日数は？」

入国審査官はたずねた。

「二日間」

「滞在地は？」

「東京……」

OKと、その言葉だけを正しい英語で発音し、入国審査官は彼のパスポートに入国査証のスタンプを押した。

アトキンズのすぐ後に、白人の女が順番を待っていた。

女の髪は美しいシルバークレイ。黒っぽいサングラスをかけている。年恰好は、三十歳前後であろうか。すらりと垢ぬけた身なりのいい女だった。

その女はアトキンズと同じ便でニューヨークからやってきたのだが、アトキンズ自身は、それに気づいていないしなかった。

アトキンズはファーストクラスの座席だったが、女はエコノミーだったから、お互いに顔を合わせる機会がなかったのかもしれない。

しかし、女が、ひそかにアトキンズを尾行して、ニューヨークから東京へやってきたのは、女の挙動からみて、確かなことのように思える。黒っぽいサングラスの奥に光る女の眼が、アトキンズにびつたりと吸いついているのだった。

アトキンズは、入国審査を終えると、後ろをふり返ろうともせず、大股で手荷物受取場へ向った。

ベルトコンベヤーにのって乗客たちのトランクやスーツケースが運び出されてくる。コンベヤーの回りを取り囲むようにして、自分の手荷物が眼の前に運ばれてくるのを根気よく待っている乗客たちの群れ……。

アトキンズも、手荷物があらわれるのを待っていた。

女は、アトキンズから数人の乗客を隔てた位置に立ち、はた目には自分の手荷物を待っている一人の乗客に

しか見えない。だが、サングラスで隠された目はアトキンズの動静を注意深く観察していた。

もう一人の尾行者がいた。三十代の髪の高いアジア人である。顔だけは日本人のように見えるが、身にそなわった雰囲気は、どことなしに異国人めいていた。

この男は、左の掌に小さな隠しカメラを握りこんでいた。器用な手つきで、彼は人知れずシャッターを切っている。

この男がシャッターを切るチャンスは、決ってアトキンズとシルバークレーの髪の女とが同時にカメラレンズの視界に飛びこむときであった。

盗 聴

アトキンズは自分のトランクを受けとると、税関検査場へ向った。

彼は、「申告なし」とパネルの下った場所で税関検査